

2026年2月16日 日本テレビ定例会見

《要旨》

1. 営業状況

・放送収入

2月5日に第3四半期の決算が発表されました。日本テレビとしては、特にスポット広告収入が好調だったこともあり、グループ全体の売上およびすべての利益で過去最高となりました。明けて1月、タイムはわずかに前年を下回って着地しました、前年比99.9%です。

一方スポットは、在京5局を通じて1月単月の歴代1位の売上を記録しました。前年比109.7%です。シェアは31.6%と、引き続き高い水準を維持しております。タイムとスポット合わせたトータルでは、前年比104.6%での着地となりました。

・放送外収入

(澤専務)

イベントに関しては年末から行っておりました舞台「忠臣蔵」は東京から長岡まで全 6 公演行いました。合計 4 万 5,000 人あまりの方にご来場いただきました。お客さんからも出演者からも内容の評判がよく、再演を望む声が届いております。

「オルセー美術館所蔵 印象派 室内をめぐる物語」も先週閉幕いたしました。46万9,000人という予想をはるかに上回る入場者数を記録することが出来ました。

「ガウディ没後 100 年公式事業 NAKED meets ガウディ展」は現在寺田倉庫にて開催中です。

映画については「新解釈・幕末伝」は興行収入が約 11 億円まで達しました。

「機動戦士ガンダム 閃光のハサウェイ キルケーの魔女」は日本テレビが宣伝パートナーとして参画しておりますが公開 3 週目で興行収入 18 億 9,000 万円ということで、前作を上回る勢いでございます。

最後に新たな挑戦として行いました「有吉の壁 劇場版アドリブ大河『面白城の 18 人』」はバラエティと映画をミックスしたような形、番組発の映画です。小規模な公開ながら目標をはるかに上回るおよそ 2 億円の興行収入を得ることができました。バラエティと映画の融合というコンテンツでいうと新しいジャンルへの挑戦ができました。今後もチャレンジしてまいりたいと思っております。

2. 質疑

国分太一さん、城島茂さん、松岡昌宏さんとの面会・「ザ!鉄腕!DASH!!」について

Q. 先週、国分さんが、福田社長と面会し謝罪した事などについてコメントを出しました。改めて社長の詳細、所感をお聞かせください。城島さん、松岡さんとも面会されたとのことですが、可能な限りご説明いただけますか。

A. 昨年末、国分さんから謝罪文が届きました。ご自身のコンプライアンス違反行為について真摯に反省し、日本テレビはじめ関係者に迷惑をかけてしまったことを心からお詫びするという内容でした。落ち着いたら私が会って直接話をしたいと当初から思っていたので、先日、2人だけで会いました。

その際にも、「私の行いでご迷惑をおかけしてしまい本当に申し訳ありません」といった謝罪があり、とても誠意あるものと受け止めました。人権救済の申し立てについても、国分さんから「今後するつもりはない」との発言がありました。この状況下で日常を失い辛い思いをされているご家族については感謝の言葉を繰り返し述べていらっしゃいました。城島さん、松岡さんにも本当に助けてもらっていてありがたいとおっしゃっていました。

当社としては事案の重大性を鑑みた厳しい立場に変わりはありませんが、心から反省されていると受け止めました。長年苦楽を一緒に過ごしてきた仲間として、私からは「今後何か相談ごとがあれば連絡してほしい」と伝えました。

一方、これまで城島さん松岡さんに対しては、国分さんの降板以降、本件について直接のご説明ができていない状況でしたので、私からお願いをして、今年になってから、私とチーフプロデューサー、城島さん、松岡さんと4人でお会いすることが叶い、説明と謝罪をすることができました。

当社としてはお二人に引き続き、「ザ!鉄腕!DASH!!」を牽引していただきたいと思っていましたが、松岡さんからは「ここで区切りをつけたい」との申し出が後日ありました。もちろん、大変残念な気持ちもありますが、引き続き番組を応援し、見守っていただけるとのことでしたし、「DASHで培った経験を大切にしてこれからも精進していきたい」と伺っておりますので、私たちも松岡さんを応援していきたいと思っています。松岡さんには30年間、番組を支え続けていただき本当に感謝しかありません。

城島さんからは、あらためて「ザ!鉄腕!DASH!!」で後輩や番組のスタッフたちと共に汗をかきながらよりよい番組作りに取り組んでくださるとの非常に意欲的な思いを伝えていただいております。番組で触れ合った師匠らから授かった知恵と志を次世代へつないでいくことが自分の責務との力強いコメントもありました。頼れるリーダーとともに、「ザ!鉄腕!DASH!!」をこれからも子供たちに見ていただきたいし、家族で見たい、そして他に類を見ない、誰にも真似をすることができない番組にしていきたいと番組スタッフ一同、気を引き締めているところです。今後とも進化していく「ザ!鉄腕!DASH!!」に期待していただきたいと思っております。

Q. 国分さんのリリースの中に、関係者の方にお詫びの手紙を渡していただくことが叶ったとありましたが、すでに手紙は関係者の元に渡っているということでしょうか。

A. はい。頂いてすぐに届けております。

Q. 関係者はどのような反応だったのでしょうか。

A. 反応は、ここではお伝えしない、ということでご理解いただきたいと思います。

Q. 12月の定例会見の時点では、国分さんと対話する用意はあるけれども今の状況では難しいと発言をされていましたが、年が明けて対話をされることになった一番の理由としては年末に受け取った謝罪の手紙で先方の誠意を感じたからということでしょうか。

A. そのとおりです。手紙の内容から、真摯に反省されている様子だと受け止めました。それでお会いしましょう、ということになりました。

Q. 番組は今後も続けるということでしょうか。

A. はい、続けてまいります。

Q. 国分さんは会見などで一貫して「答え合わせ」を要求していましたが、「答え合わせ」は行われたのでしょうか。

A. ございませんでした。一切触れられることはなく、終始、お詫びされているという状況でした。

Q. 面会の時に「答え合わせ」の要求はなかったのでしょうか。

A. はい。なかったです。

Q. 国分さんは面会の時、どのような様子でしたか。

A. 私の感想としては、お詫びされているわけですから、特にハキハキとされているわけではないですけれども、ご家族のことを大変心配されていて、そのことで気落ちをされていることは間違いないとお見受けしました。

Q. 面会の時期はいつごろでしたでしょうか。

A. 詳細はお伝え出来ないのですが、つい先日です。

Q. 国分さんは「答え合わせをしたい」と訴えて人権救済を申し入れたのにも関わらず、面会をしたときに答え合わせをせずに「人権救済の申し出をしない」と言ったことに違和感があるのですが。

A. それはご本人に聞いていただくしかないと思うのですが、実際に何もなく、お詫びだけおっしゃっていて、ただ、当方からはヒアリングの際に国分さんの口から確認できたことだけでも（降板の理由に値する）、という説明はしておりますので、その部分にご理解をいただいたのではないかと想像はします。お目にかかった時には一切その話はなかったです。

Q. 国分さんの謝罪は何についての謝罪だったと認識されていますか。

A. コンプライアンスに違反したことについて改めて直接お話しするのは初めてでしたからそのお詫びをしていただいたと思っています。

Q. 何のコンプライアンス違反に該当しているのか分からないまま会話しているように思えるのですが、それでも謝罪としてうけられるものでしょうか。

A. 私には全く違和感はありませんでした。日本テレビ、関係者、番組のスタッフに本当に迷惑をかけてしまいましたと。実際、これだけの騒ぎになってしまったわけですから、色々なこと、例えばスポンサーへの説明も必要でしたし、収録したものの扱い、これから番組をどうしていくかについては、何もなかった時に比べると、大きな課題を抱えながら何か月も対応してきましたので、おそらく想像してくださったんだと思います。それに対してのお詫びをいただいたと思っています。

Q. コンプライアンスに違反した行為ということだけで、中身を過度に伏せたことによって問題が長引いたというふうにも見えるのですが、どうお考えですか？

A. 結果そうになっているかもしれませんが、関係者を守るということを第一に対応してきたので、仕方のないことだと思っています。

Q. 国分さんと会ってある種、この問題は、お互いに合意を得て、一旦落ち着いたという認識でしょうか。

A. 今までは、代理人を介しての会話でしかなかった、それでなかなかお互いに伝わり切れていない部分もあったので、2人で会ったわけですけれども、お話をして双方の理解は深まったとは思っております。今後、おそらくですが、代理人同士の申し入れ、交渉というものはなくなると思います。何かあれば直接会話をさせてもらうことになると思いますので、落ち着いた状況になると思っております。

Q. 今後、国分さんが出演することはありますか。

A. 国分さんは今後のことについて今は一切考えておりませんということでしたので、そのような状況ではありません。

Q. 事案発生から、半年以上になりますが振り返ってみていかがですか。

A. 代理人同士のやり取りになってしまったことによって、会ってお話するタイミングが遅くなりましたね、とご本人にもお伝えしました。そこに尽きるのかなと思います。先方の代理人が動き始めたところから距離が出来てしまったという印象は今でも変わっておりません。あの時は番組を守ることで精一杯でしたので、会って話をするに関しては早いと思っていましたが、代理人の方が出てきたことで余計に遅くなってしまったと思います。

Q. 本人同士でやり取りするのが理想的だったと思っているんでしょうか。

A. もちろんそうだったと思います。そのつもりでいましたので、年をまたいでしまったのが残念でしたが、お目にかかれてよかったと思っています。

Q. 出演者との何かしらがあった時には今後は速やかに本人同士のやりとりにするという指針ができたということでしょうか。

A. すべて私が「本人」になるのかは別として、そういうコミュニケーションを番組が持っていてくれることが望ましいと思います。

Q. 日本テレビガバナンス評価委員会の意見書ですが、弁護士、有識者の方は事案そのものについて評価することはなかったのですか、または事案そのものは知らされて議論したが意見書には載せなかったということでしょうか。

A. (柴田副社長)

委員の方には事案の詳細は報告しています。疑問点があれば我々が調査してわかる限りのこととお話はしています。それを踏まえて、事後処理の手続きが適切だったかを、報告書の間とりまとめの際に見ていただけたけれども、そこでは当然、事案そのものがどういう性質のものだったのか、非はどちら側にあると思われるのかも、先生方はそこで得た情報の範囲内で考えになりながら判断をしているということが一点。

もう一点は、事案そのものについて公開するべきかどうか、当然、するべきではないという結論なので、公開していないのですが、その後発表された最終意見書では、様々なトラブルが起こる可能性があるテレビ局の業務を踏まえて、こういうこと気を付けたらいいのではないかと、あるいは

は、何かあった時にはこのように声をあげられるようにした方がいいのではないか、という一般論の提言していただいた。そこがある意味で、事案発生を未然に防ぐための提案であると理解しています。

Q. 委員の方には(事案の詳細を)伝えて当事者の国分さんには伝えられない理由はありますか。

A. (柴田副社長)

国分さんには事情を伺った際に、自ら思い当たることをおっしゃっているのも、それ以上お伝えすることはないということだと思います。

(福田社長)

評価委員会の方とは守秘義務を結んでいますから一切外には出ません。そのうえでお話をしています。

Q. 国分さんが話した内容がコンプライアンス違反の内容だったということですか。

A. (柴田副社長)

全くイコールということではなく、何度も福田がお伝えしていますが国分さんが自らおっしゃった内容だけでも十分日本テレビのコンプライアンス違反に該当するという判断をさせていただきました。そこで国分さんがおっしゃった内容は委員の先生に説明している内容に含まれていますので、そこで共有はされているということです。

Q. 事案を公にしなかったことでテレビ局の管理責任や、問題を矮小化しているのではないかという指摘もあったかと思いますが、日本テレビに瑕疵はなかったという理解でいいですか。

A. より良い番組の制作の現場を作ることではできると思いますので、本件が起きる時点で我々ができることを全部できていたかというところではないと思っていますので、改善に努めている最中であります。

Q. 松岡さんは週刊誌などで日テレの対応について疑問視している様子がありましたが面会の時は、そのような部分はありましたか。

A. 先に私の方からお詫びいたしましたので、それに関して意見をいただくことはありませんでした。私の謝罪はしっかりと受け止めてくださったと思っています。

Q. 日本テレビから面会をお願いしたということですが、スムーズに面会できたのでしょうか。

A. はい。受けていただきました。

Q. 城島さんと松岡さんにはどういった趣旨でお詫びをしたのでしょうか。

A. お二人には番組出演者であるにもかかわらず、日本テレビとしてしっかりと説明が出来ていなかったということに対するお詫びです。覚知した時には認識があるということはお互いわかっているんですが、それ以上の説明、お二人は「大丈夫よ」という感じのことをおっしゃっているとのことだったので、番組としても本当に甘えてしまっていたな、ということです。非常にセンシティブな内容を含んでいたのも、なかなかストレートにお二人にもお話するのが難しかった状況がありました。そのまま、その状況が続いてしまって昨年末に至るまで説明することができなかったことについてお詫びをしたということです。

Q. 謝罪をされた時のお二人の反応はどうでしたか。

A. しっかり受け止めていただいております。

Q. 日本テレビとしては、引き続き出演をお願いしたかったと思いますが、そこに(降板と継続の)差がうまれてしまった原因は何だと思えますか。

A. (出演をお願いしたかったことは)もちろんです。(差については)分かりませんが、松岡さんは、これからも番組を応援すると言ってくださっていますので、そこに期待をしたいと思っています。

Q. 結果として松岡さんが降板することになりましたが、今回の一連のことへの反省、教訓はありますか。

A. 結果として降板したのか、というのは松岡さんに聞いていただかないとわからないと思いますが、私はそのようには受け止めていません。

Q. プロデューサーがロケ現場で城島さんに接触しようとして断られたと報道がありましたが事実関係、認識を教えてください。

A. そのような事実はありません。

Q. 面会の後、松岡さんからは降板、城島さんからは継続の意思が届いたという認識でしょうか。

A. そのとおりです。

Q. 松岡さんが降板されたということで収録済みの出演シーン等、放送されないなど影響はありますか。番組に出演されることはないのでしょうか。

A. 松岡さんについて、出演されていて未放映のものはありません。新しく撮ることはありません。過去の映像の使用については検討するかもしれません。

Q. 松岡さんの降板の発表が唐突でしたが、日本テレビと話し合っただけでそのような形になったのでしょうか。

A. 話し合いはしておりません。面会の時には説明不足についてのお詫びしたのみでしたので、その時に明確な意思表示はありませんでした。

Q. 降板は発表前に事前に聞いていましたか。

A. 日本テレビには発表前に降板の連絡はいただいていたと思います。

Q. 発表のタイミングを話し合うことなく、松岡さんが唐突に発表したのでしょうか。通常は出演者と局側と一緒に発表するのが通例だと思うのですが、このような形になったのは理由があるのでしょうか。

A. 唐突な発表というイメージは無いのですが、日本テレビには事前にお断りをいただいて発表されたということです。城島さんから、松岡さんに追ってメッセージを出したいという意向が届いたので、我々の発表は城島さんのメッセージをいただいてからということで、あのタイミングになりました。

Q. 松岡さんらの面会と国分さんとの面会と、どちらが先でしょうか。

A. 城島さん、松岡さんらとの面会のほうが先です。

Q. その時に国分さんについての話題はあったのでしょうか。

A. もちろん全くなかったということはありませんが、それが何か(その後の国分さんとの面会に)影響するような会話はありません。

Q. 城島さん、松岡さんが他の番組に出る可能性はありますか。

A. 今回は「ザ!鉄腕!DASH!!」に関するお話でした。一切日本テレビには出ないということはありません。

Q. 「ザ!鉄腕!DASH!!!」を終わらせるという検討は無かったのですか。

A. それはありません。意義のある番組だと思っているので、引き続き継続していきたいと思っていました。

Q. 「ザ!鉄腕!DASH!!!」を続ける理由は、人気番組だからでしょうか。

A. 人気番組というのは高視聴率を獲得しているということでしょうか? そういうことであれば違います。番組の存在意義、青少年推奨番組とかつて言っていましたが、「青少年に見てほしい番組」として(民放連に)届け出ていますし、そういう番組になっていると思ってますし、今の状態がお子さんに見せて恥ずかしいものであるとは思いませんので、このまま継続させていただくということです。

今年 1 年の抱負について

Q. 今年最初の定例会見です。福田社長の 1 年の抱負、意気込み等を聞かせてください。

A. 私たちはここ数年、テレビの最大の強みである“祝祭性”を意識した編成に注力してまいりました。今年も「誰かと見たい、が、一番見たい。」みな

来月 3 月に始まる「ワールドベースボールクラシック(WBC)」では Netflix さんと“プロモーションパートナー”として連携し、日本中の熱狂を後押しする開幕特番などを放送いたします。その盛り上がりこそが、日本のプロ野球開幕への機運を一層高めてくれるものと確信しております。

6 月と 7 月には「サッカー ワールドカップ」の中継を行います。日本代表の重要な一戦であるグループステージ第 2 戦「チュニジア×日本」を含む、計 15 試合を地上波でお届けする予定です。夏には、昨年反響を呼んだお笑いの祭典、今年はさらに進化させていきたい「ダブルインパクト 漫才&コント二刀流 No.1 決定戦」や、「24 時間テレビ」、さらに秋には池井戸潤先生の原作を映像化する連続ドラマ「俺たちの箱根駅伝」という、日本テレビにしか作れないであろう圧倒的なスケールの大きい作品を準備しております。

また、昨年 5 月に発表した中期経営計画では「日テレ開国！」を掲げました。2026 年はグローバルコンテンツメーカーとして、目に見える実績を積み上げる勝負の年にしたいと考えています。日本テレビが自社開発した AI ソリューション「AiDi(エイディ)」は、早速アメリカの NBC Sports に採用されております。

バラエティ企画の海外フォーマット展開を狙う「GYOKURO STUDIO」は戦略的に日テレコンテンツの世界進出を進めており、スタジオが生み出したバラエティ番組「ANTS～ぜんぶ運べば一攫千金～」が、ヨーロッパで最も権威ある国際テレビ賞「ローズ・ドール賞」において、「最優秀コメディエンターテインメント賞」、また同番組とドラマ「ホットスポット」が「ContentAsia Awards 2025」で最優秀の金賞を受賞しました。今後もより体制を強化し、世界へ市場を広げてまいります。

また、コンプライアンスの徹底を経営課題とし、正しく認識し、修正すべき点は直ちに改め社内における適正化を進めてまいります。

社内で、私の一存で決めている“今年の漢字”は 12 年目を迎えました。社長就任のタイミングで昨年からグループ全体の 1 年の行動指針として共有しています。今年は初めて 2 年連続となる字を選びました。「動」＝「うごく」「うごかす」です。立ち止まっていたら世の中の大きなうねり、メディア環境・事業環境の激しい変化に飲み込まれてしまう、そんな思いから今年も選びました。今年も社員一丸となって時代を動かしていきたいと思っております。

WBCの中継制作について

Q. WBCの中継制作を担うということですが経緯、中継制作に掲げる思いなどを聞かせてください。

A. (岡部取締役)

今回、ライブ配信はNetflixさん独占となりますが、その舞台となる東京ラウンド、東京ドームにおいては中継制作を日本テレビが担い、アメリカに渡ってからの準々決勝・準決勝・決勝でも日本向けの映像制作を担います。そしてプロモーションパートナーとして大会全体の盛り上げを牽引することに、熱い決意を持って臨んでおります。

日本テレビには、1953年の開局翌日から野球中継に取り組んでおり、70年以上にわたり、野球の魅力というものを伝え続けてきて、その野球中継の圧倒的な技術力、そして実況アナウンス力があると自負しております。この財産を最大限に活用し、WBCという国民的関心事を最高の形でプロデュースすることが、日本のスポーツ文化の醸成、さらには3月27日に開幕する日本のプロ野球の熱狂にも直結すると確信しています。

大会連覇に挑む侍ジャパンの勇姿を、日本、そして世界へ、我々日本テレビの手で届ける、その責任と誇りを胸に、現在全社を挙げて準備を進めております。私自身も第1回大会から見守ってきた一人の野球ファン、侍ジャパンのファンとして、あの震えるような興奮を再び皆様と共有できることに、心からワクワクしております。

Q. Netflixと協業することのメリットはどのようなところにあるのでしょうか。

A. (岡部取締役)

世界最高峰の大会に日本テレビとして、70年来野球中継に携わってきたものとして、非常にやりがいも感じているし、意気に感じていますし、しっかり野球の魅力を伝える、というところにメリットを感じています。

(福田社長)

今回、Netflixでは有料でないと視聴できないので、私たちが生放送としてお伝え出来なくても、様々な情報を出していくことが出来れば、多くの方に喜んでいただけるのではないかと思います。

Q. 中継は日本テレビのアナウンサーが実況するのでしょうか。

A. (岡部取締役)

はい。日本テレビのアナウンサーが実況を担当いたします。

Q. Netflix側から日テレに話がきたのか、日本テレビから手を挙げて話をしたのか、経緯を教えてください。

A. (岡部取締役)

交渉の経緯、プロセスは差し控えさせていただきます。

Q. 生放送はできないということですが、ディレイでの放送の可能性はあるのでしょうか

A. (岡部取締役)

日本代表の、侍ジャパンの大会2連覇に向けての戦いぶりというものをLIVEで見られなかった方のためにしっかりお届けできる手段というものを準備しております。

9枠の特別番組という枠数は発表しており、その内容に関しましては改めて今後発表してまいります。試合をまるまる録画放送で伝えるということは考えておりません。

Q. Netflix などのプラットフォームの要請に応じて制作を供給する存在になるかと思います。配信の時代になってこのような流れは避けられないのかと思いますが、日テレとしてこの WBC を機に何か展望はありますか。今回、プラットフォームの下請け的な存在になるわけですが、野球中継を担って成長をしてきた日テレとして、時代の帰路なのかなと思うのですがその点いかがでしょうか。

A. 今後のことはわかりません。今回はこのような形で参加しますが、もちろん自らが中継・制作をして放送したいという気持ちは強くありますので、今後これでいいということは一切思っておりません。下請けのように見えるかもしれませんが、WBC、日本中が注目する野球の試合の中継制作を担当するわけですから、プライドを持って臨む仕事だと思っております。自らすすんで仕事をさせていただきますので、その辺は誤解の無いようお願いしたいと思います。

Q. プロモーションパートナーということですが、これは他局よりも使える映像が長くなるなどメリットがあるのでしょうか。

A. (岡部取締役)

特別枠 9 枠編成をすることで、WBC の魅力を日本中の皆様、楽しみにしている皆様にお伝えできる形で放送をしていきたいと思っております。

Q. 日本テレビとしては WBC 以外の代表戦についてどのように取り組んでいきたいと考えていますか。

A. 具体的に決まっていることは何もありません。WBC も第一回は中継しております。野球というコンテンツに対しての意欲は旺盛に持ち合わせておりますので強い興味をもっております。

衆議院選選挙報道を振り返って

Q. 去る 2 月 8 日に投開票が行われた衆議院議員選挙報道を振り返って所感をお願いします。

A. 解散から選挙まで異例の短期間ではありましたが、今回も報道局全体で選挙報道に臨むため、1 月 19 日から「選挙報道プロジェクト」を立ち上げ、密な意思疎通とチェック体制を整えました。有権者の投票行動に資するため、3 つの柱で展開しました。

1、「事前報道」 2、「それって本当」 3、「選挙特番」

1 つめの「事前報道」では、政治的公平性にも配慮しながら、当社各ニュース番組で、党首討論、政党幹部討論のほか、キャスターによる各党首インタビュー、各政党を徹底取材する「政党フカボリ」、焦点となる政策を「ひと目で分かる政策比較」という形でわかりやすい解説に努めました。

2 つめの「投票前に考える それって本当？」は去年の参院選に続き、今回も報道番組横断のキャンペーンを展開。専従チームを立ち上げ、ニセ情報・誤情報に対する有権者の“免疫力アップ”を目指した“プレバンキング報道”(=ニセ情報の見破り方や専門家による注意など)と、実際に拡散している偽・誤情報の検証の2本柱で放送しました。過激な虚偽言説の拡散は、前回参院選に比べると比較的少なかった印象ですが、今回は生成 AI を悪用して政党ロゴを改ざんしたり、政党幹部や候補者の虚偽動画を作成したりなどの手口が増えており、生成 AI に関する注意喚起にも注力しました。

3 つめの「選挙特番」、おかげさまで第 1 部パート1は個人 7.0%・コア 6.8%、パート2も個人 4.7%・コア 4.7%と、個人は民放の中でトップ、コアは NHK さんを含め全局の中で、最も高い結果となりました。番組では、20 時の出口調査結果から、注目選挙区のVTR 43 本と開票速報、小栗泉特別解説委員によるスタジオ解説のほか、櫻井翔さんによるデータ解説や党首中継インタビュー、そして高市早苗首相の考える「国論を二分する政策」にこだわって詳しく掘り下げてお伝えしました。

今回は事前報道などから、選挙に対する若年層の関心が非常に高いと感じていましたが、そんな中、コア層をはじめ多くの皆様に、日本テレビの選挙報道を支持していただけたと自負しております。

そして選挙の結果、政界は高市首相を中心とする自民党一強の構図となりました。今後の政権の舵取りを引き続き注視し、皆様にしっかりお伝えしていきたいと思っております。

Q. 今回も NHK も参加して 3 社合同で出口調査を行ったのでしょうか。

A. (伊佐治健取締役執行役員 報道担当)

昨年の参院選に続いて衆議院選としては初めて NHK さん読売新聞さんと実施いたしました。大変上手く進んだと思っています。調査方法の違い等はもともとございましたので、分析などに手間取ることも考えられましたが、読売新聞さんと 2 社でやっていた時よりも、回答のサンプル数が圧倒的に増えました。精度を高めるきっかけをつかめたという実感がございます。まだいくつも研究すべき点はございますが、協力関係をぜひ、次回以降に生かしていきたいと考えております。

「真相報道バンキシャ！」の放送内容について

Q. 2月15日の「真相報道バンキシャ！」の放送の内容について SNS 上で日本テレビが説明を行っていましたが事実関係を教えて下さい。

A. (伊佐治健取締役執行役員 報道担当)

先日の「真相報道バンキシャ！」の放送内容で、今回の選挙で当選した新人議員の企画の内容で、タスキの運用につきまして番組側の認識が不足していたことがわかりましたので、その部分について取材に協力いただいた村木汀さんら関係者に、まず X 上でお詫びいたしました。放送の原稿の流れの中で「名前の入ったタスキをかけていないのは、比例順位下位で当選できないと思っていたから」と、誤解を招きかねない流れになっていたためです。

Q. この件は解決済と考えていいのでしょうか。

A. (伊佐治健取締役執行役員 報道担当)

はい、この件は X 上で自民党鈴木貴子広報本部長からの指摘で覚知いたしました。早く対応すべきであると判断し、X 上での発信が良いと判断し行いました。当該の鈴木本部長からはご理解をいただいております。また当事者の村木さんにつきましては X 上でのお詫びと共に、直接お詫びする方向で今準備をいたしております。

Q. 来週以降の放送で経緯の説明や謝罪を予定していますか。

A. (伊佐治健取締役執行役員 報道担当)

放送での訂正等は現在検討中です。タスキの運用につきましては番組の認識が不足しておりまして、X 上で、まずコメントを載せました。視聴者の皆様にも説明をする方向で検討をしております。

Q. 瑕疵はあるものの、党の広報本部長から指摘が来たことで報道の委縮につながったりしないでしょうか。番組制作のスタンスは変わらないのか、あるいは、変わるべきことがあると思っていますのか聞かせてください。

A. (伊佐治健取締役執行役員 報道担当)

権力側、政権への向き合いは日頃から注意しております。私たちメディアの政党や政権への向き合い方は、権力による圧力であるかどうかなど、常に慎重に判断すべきだと思いますし、そのように対応しております。一方で、報じる側の認識不足で関係者らにご迷惑をかけたとするなら、その関係者らに対し、真摯にお詫びすることは必要だと思っております。今回の対応はそのような考えのもとに行っております。ただ改めまして、私どもメディアとして権力の監視、私たちのスタンスはこのようなことがあっても一切変わることはありません。

BS4K の放送免許更新について

Q. BS4K の放送免許を更新についての方針について教えてください。

A. (里賢一取締役執行役員 メディア戦略担当)

BS4K については、在京キー局系の BS5 社が、配信においても 4K コンテンツを展開するということで関係者(BS の在京 5 社、プラットフォーム、総務省)含めて最終調整に入っています。どのプラットフォームで行うのか、どの程度の費用をかけて、どの程度の規模で行うのか、いつスタートするのか、最終調整しております。皆様のもとにもリリースという形でお知らせすると思いますので、決定をお待ちいただければと思います。

第 3 四半期の決算について

Q. 日本テレビグループの第 3 四半期の決算が発表されました。好調の理由は何ですか。

A. フジテレビさんのほぼ 1 年にわたる営業的なコンディションが多分に影響していると思います。当社のことだけで申し上げるとタイムのほうも悪くない状況でしたので、いい 1 年で締められると思っておりますが、来期のことは今状況の確認をしているという状況です。

Q. フジテレビさん回復傾向にありますかどのように思っていますか。

A. 元の形に戻ることは好ましいことだと思っております。

Q. この1年が放送と配信の関係の曲がり角になると思いますが、今後どのような関係になっていくと考えていますか。

A. 我々コンテンツメーカーとしては、配信・インターネットに乗せてコンテンツを出していくことについては抵抗を感じてません。1つの伝送として前向きに考えています。今回のWBCのような形になることもあるかもしれませんが、放送は放送でその強み、リーチ力などをマーケットから評価していただいている部分もございますので、引き続き一生懸命取り組んでいきたいと思えます。どちらかやってどちらかをやらないということではなく、両方に対して積極的に対応していくという考え方に変わりありませんが、ご指摘のとおり去年今年あたりは大きく状況が変わっていくタイミングだと思いますので、より慎重に、より積極的にやっていきたいと思っております。

ドラマ「冬のなんかさ、春のなんかね」について

Q. 今放送中のドラマ「冬のなんかさ、春のなんかね」は非常に挑戦的なドラマだと思います。配信も意識しているのだと思いますが、なぜこのようなドラマをプライム帯で放送しているのでしょうか。

A. (岡部取締役)

このドラマはネットでも話題になっており、地上波でチャレンジングな企画、コンセプトだったと思いますが、色々な形で色々なドラマを色々な局がやっていくのが今後のテレビとしての持続性でも大事だと思いますので、チャレンジとしての評価ができると思います。一方でマスメディアとしてより多くの人に見てもらわなければならないという点についてはこのドラマを通して編成というものをしっかり検証していかなければならないと考えております。今泉力哉監督は、リアルな恋愛というものを描かせたら日本で一番うまい、しっかり心に刺していく担い手だと思います。杉咲花さんという素晴らしい俳優さんが演じているのも見ていただければと思います。

映画「果てしなきスカーレット」について

Q. 昨年公開の「果てしなきスカーレット」について、全米公開が始まると思うのですが、公開にあたっての期待と、国内の興行が不振だったと伝えられていますが、現時点での反省などありましたら教えてください。

A. (澤専務)

ご指摘のとおり、この映画に関しては大きな期待をもって日本公開を行ったのですが、かなり興行成績は不振のまま国内では終了いたしました。分析については今行っているところですが、皆様お気づきのとおりSNSのネガティブキャンペーンの波に飲み込まれてしまったのが一番大きな要因だと感じています。これによってライトユーザーをとり逃してしまったなというところがありました。世界においてはそういったネガティブキャンペーンが行われておりませんので、例えばアメリカではアニー賞にノミネートされたこともございますので、こちらの世界公開については期待をもっているという段階です。

(了)

福田 博之 代表取締役社長執行役員
柴田 岳 取締役副社長執行役員
澤 桂一 取締役専務執行役員
岡部 智洋 取締役執行役員

※回答者名のないものは、福田社長による回答です。